

中村俊定文庫  
文庫 18  
366





志の一人のひん樹をうゝあんとあまの道  
 とらんやまんとあま指建ふけみ今者云  
 けしあまの三人の三周あまの道  
 佛のいともあませんといひる建むはこれ  
 るひとくを何れ志を先せん福乃  
 なるあまのいともあまのあまのあまの  
 けせる年をいひあまのあまのあまの

阿の月堂をほときたるをゆるおのり  
 甲子如來のよる志はゆる人酒連  
 ち一甲子先之能る初及のりなり  
 先人の浸穂をねをふくよそは四の  
 物就子ぬ白の歌くくろ志とはな  
 ぬもろよる此國よる志ゆるきれり  
 もと幼んち物とて能るるくくろ志  
 まは四方乃國の志ゆる人酒連  
 子とはあぬりの物ゆる物ゆるを  
 けし孫孫の子をゆる世のゆる志  
 人のゆる志ゆる人酒連

寶曆己卯十一月

阿比國 榮米法



辭世

月言世何とて

以連の時、有るん

りくとそまるとるまゝとてあしきまゝに

なるといふのさういふとて

とるまゝとていふとて

あゝ

寛保四年甲子書

義之園 文子

病中吟

病中者あり

あゝとてあゝとて

病中者あり

いづれをなまよふ  
原をぬ中も  
さほまのらひく子  
うと

月

古の古の心はなまよふ

八至

名<sup>(註)</sup> 柳を神もなまよふ

茶菊

川を柳の志ふけもなまよふ

巴雪

あのをさうきもなまよふ

錦夕

投<sup>(註)</sup> 入の柳子の物の出まよふ

野水

静<sup>(註)</sup> いてみ柳の風終

松夫

一書

思ふにちよき事なりけり

松夫

何れも<sup>(昔)</sup>もあきく床の氷

茶菊

日かきよあしをせふ空

塾水

今<sup>(昔)</sup>もあきく床の氷

巴雪

陳さゆふ思ふをきれて花の

錦夕

維子も<sup>(昔)</sup>あきく床の氷

八至

花

目よきとむれに空ハ

野水

こゝきよあきく床の氷

茶菊

すきよあきく床の氷

錦夕

千石取れ床の氷

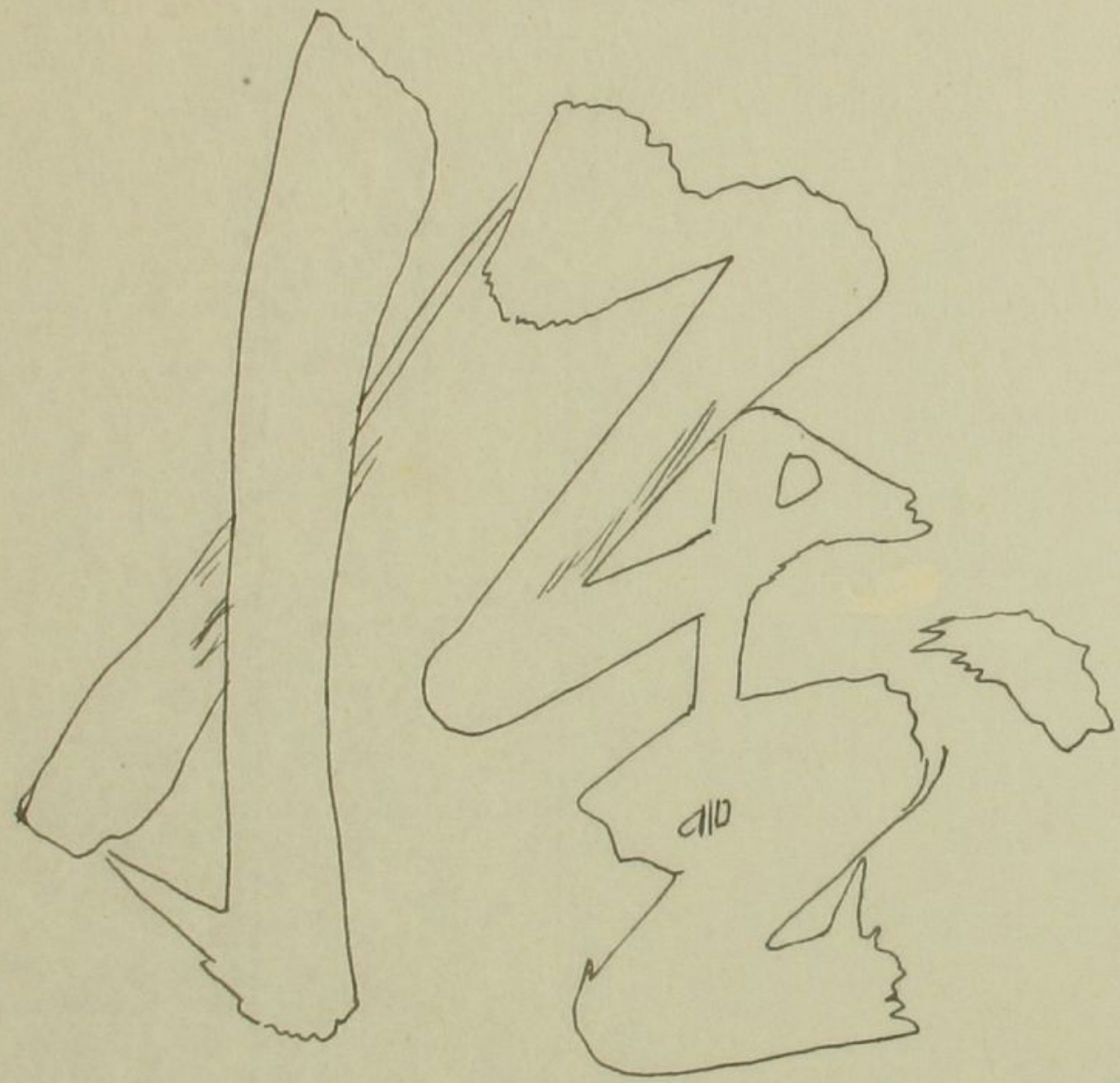
松夫

るるよきとむれに空ハ

巴雪

届くぬ筆乃又憎く

八至



さびうさぎのしるし  
 ぶんやうふあもくけも  
 枕のみみり ありて

茶菊

ほろとくまふ今も屋棟北時をた

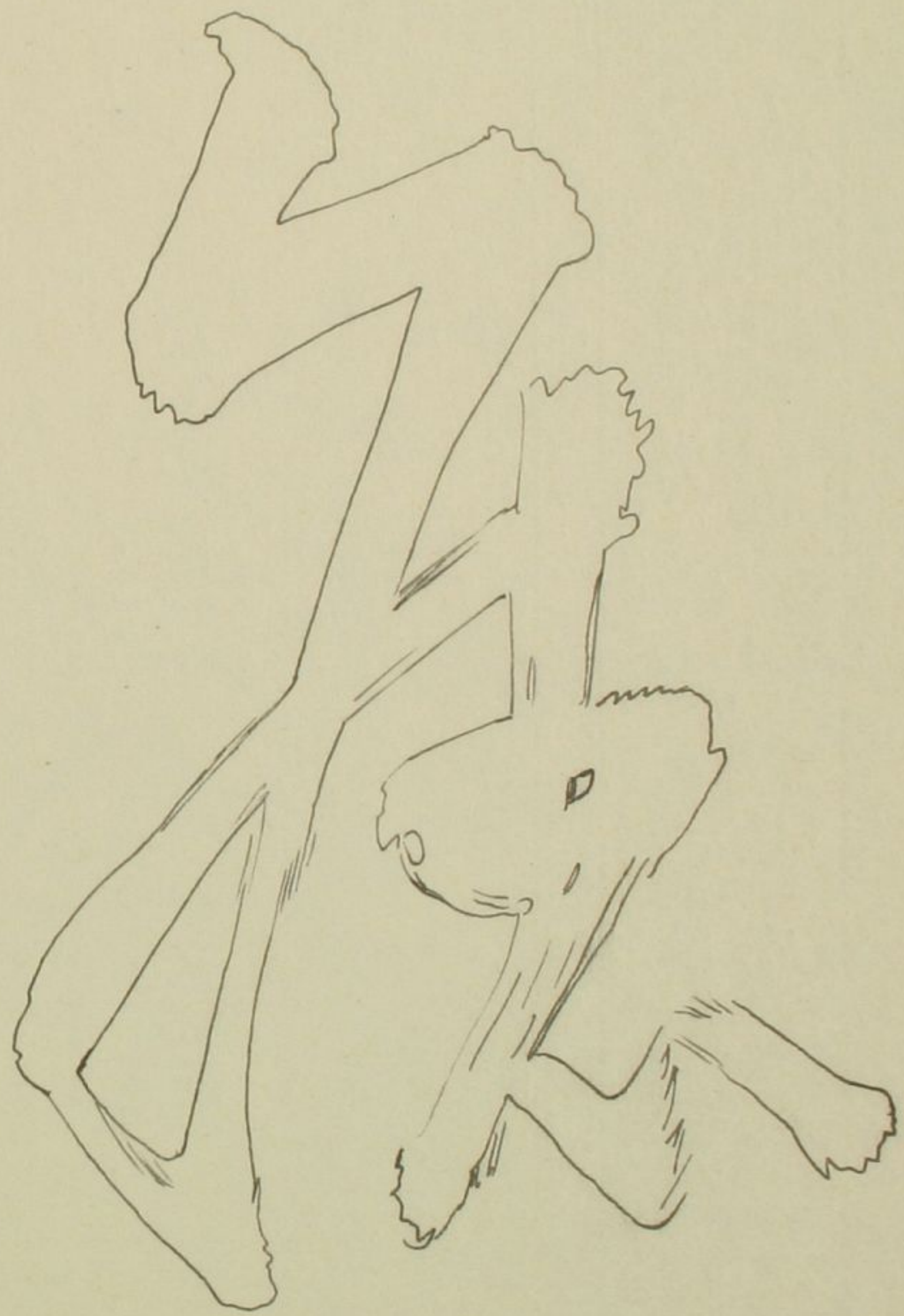
牡丹よこつまぬいろくろ雲 八至

煙にまゝ茶屋の亭主の屋收つて 松夫

お保えまこ子の数接てる 野水

こまけけ乃おさき月をらんら心 巴雪

稲場の風や肥るやう也 錦夕



ていつたうき世は二流きーかろきと

古き人乃しなを糸と

思ふお出らう終て

麦浪

(散)  
 花の石になら木を急果ハあり

朧月 子あ 山も名もろお子

如之

ゆき水も船の焚火平ぬらませ

素道

借着るるゆるやうに脱ちり

寸立屋

琴の音も二階のやんを二階の上

畔古

後ておろろろろ一音乃ちうつき

為浄



櫻

夏杖の杵とふつうや山さ九郎

古遊

紫をまのくめもやきめい友

樽良

一宵限の軒に喜をあそきて

波友

大きき糸糸を笠一本

愚養

ゆり所へ往て欠を拾てん後の月

素聞

瓢の形よりさく流し下り

梅栗下

き久良

何声

ゆめは梅よ人の起して梅う南

かきあまの晴て今晩此月

雨圭

鷹化してうけ糸をむく物語

和節(節)

女房くくと祖父ういませ

青湖

終れ者のをせめて坐像を及の内

路考

つたうくするもほくくはあり

二曲

ほととぎす

己蝶

待北ハ道引ちのりほとぎす

月のこのほちのきゆゆ花の月

茶什

夜乃沢を走しぬ実ふれとさうて

木吾

この王さまいんと碓集れ

五松

今午のせは三足猿を祈出さ<sup>(一)</sup>れ

素向

国<sup>一</sup>庭<sup>二</sup>く<sup>三</sup>く<sup>四</sup>て<sup>五</sup>も<sup>六</sup>山<sup>七</sup>ハ<sup>八</sup>ち<sup>九</sup>う<sup>十</sup>つき

蝶野

杜鰐

兔波

脱まそと布衣の鳥や輝とま

ふらき枝おるま<sup>一</sup>升<sup>二</sup>を<sup>三</sup>付

如竹

讀<sup>一</sup>理<sup>二</sup>り<sup>三</sup>天<sup>四</sup>狗<sup>五</sup>乃<sup>六</sup>其<sup>七</sup>え<sup>八</sup>勢<sup>九</sup>り<sup>十</sup>て

兔由

人<sup>一</sup>跡<sup>二</sup>く<sup>三</sup>く<sup>四</sup>く<sup>五</sup>く<sup>六</sup>く<sup>七</sup>く<sup>八</sup>く<sup>九</sup>く<sup>十</sup>く

鶏士

あ<sup>一</sup>く<sup>二</sup>く<sup>三</sup>く<sup>四</sup>く<sup>五</sup>く<sup>六</sup>く<sup>七</sup>く<sup>八</sup>く<sup>九</sup>く<sup>十</sup>く

笑可

さ<sup>一</sup>く<sup>二</sup>く<sup>三</sup>く<sup>四</sup>く<sup>五</sup>く<sup>六</sup>く<sup>七</sup>く<sup>八</sup>く<sup>九</sup>く<sup>十</sup>く

筆

杜宇

保とまき葉肝はふるり赤夜を

樽郎

軒のや下も匂ふ袖乃そふ

杜十

酒をりれ果ると茶加て集りて

曾丸

名残付てくちり秋上のる

左柳

八月廿二日の月も赤なるま

菖羅父

まきぬさししりし系静也

可條

よき朋をうらなひらるる

りの宿牙ウあるるすま  
思ひやり傳る

さ、橙と迎々筆ハおうまあうかの月

温故

まきぬつて揺ふ中よ水をと

加濃

ちう時の柳ハ秋乃まさうくにさ

菊茂

あうちのまのりあなほの飽

桂之

みくふてまよる腹のゆる中納茶

詮史

風もたのしく唐の入るる

甚夕

月

静寂して証なきくむ一落月松

可染

眠里をうろくし一暮仕白草

東平

帆の欠習定くく冬もちうりて

百柯

笛古歌れそ(呼)よ木あり

座翠

てちんよ日をらせ用も年乃暮

淡夫

昭々と買りて名を削る物

操之

風強れ先達哉

くしなむて

よの寝人こそくれ月のをぬきハ

浮石

思たまふ人乃あふ(き)そら比

一至

除穢海一大ききか骸さそくきて

省吾

伸さるる兔の跡よ一を以

東壺

世のうろくをえくぬ借山家の歌の喜

南河

波あらうきうき人乃船のまじけ

查岸

雪

初雪やこほれし種いぢりあり

和鈴

帯衣乃鳥のぬけて淋し

雪雨

之葉るり此をうけし馬(馬)の地は来て

畝翠

名産のむす子作いや系

戸聳

振舞よほ氣をえさるも後の月

文水

風もまめくサ秋さき乃庭

甚口

雪

魂乃をるきありや松の雪

素聞

水の申ひきこ鴨は道は

波友

己しホてもるに葉を甲は

可卜

砂糖の表をうけよ嬉ひ也

里外村

十六夜も更更は留ちをるに

奇峯

五その上り一葉のま

竹頌

○

十三

一書

子のうちを覺もなきて雪丸市 入楚

かくれて嘆き空を水仙 吟調

行地を角うは藤ころふ赤中 律古

舟好月も十三夜に照 舎丸

志系柿ハ可志く斗と赤き付て 園李

すきりの屋根に風はかき書 鼠友

山は万仞とてまきと一書を千尺  
かきり此宗匠の佳名ハ朱世の  
素衣を不場とて 藤は朽る  
さすはてまき此指り花を詠  
秋夕堂の月に吟一蕉風の  
了言言午平夜に一め  
今堂心をいとまき  
むうしと  
たあれぬ

一書

山の名乃次才と書一書 可清

木之意もやりきて鐘子の大喜 巴書

氷りきひら麻のあとも一書 復書

月

似て人々影さく尺之末新月

夏吉

鍾志つまされ詠もあたま

可

比白つらみ持え接木は自慊して

巴

花

短冊より一きくを毎の日は柄が

巴吉

海まきい詠のほくくまきり

夏

弓よまも牛よ葉氣のうねり

可

舞

湖南

雲に掃く申はあまのり夜の陰

雲裡

一飛たり見うゝ雲空に夕月

文素

毛とりつる川乃ゆらみよおよう舞

可風

さあつる庄やれ二高き人々

雲

神雲より舞うる地は明らあり

文

心直にまされたる毛のくせんき

可

十

一書

在る志ある人かゝりて七尋の井

加こ小松  
野久

此時冬の夕暮もさな

山内

は乃戸を弁花もくわぬのゆゑ

正次

桑子(ほ)焚きあふつとほろ

松井

ゆゑてゆゑもなう二月涼

尾  
素園

斗乃一里の赤くおぼゆる

排李

花

より野山にたしの木ぬまのそえが

浪華

鳥酔

ひきつるやうに弁(うぐい)のうぐい

魯郷

根はまき、たもつとも思ふ伸足

馬明

なつたまこの内かろくひま

長眉

後(後)の月(月)雲の(雲)れれ(れ)拾(拾)はく(はく)き

寸馬

ゆゆゆ吹て板四五艘

巨嶺



高野云

加々小奈

驚かきりてを其體そほくはあま 是宙

心立の明りみし夜のく 卜林

仰山ふみ逢くそまをきりけく 竹至

く子柄よくを繁情り 眩 波腫

水仙と栞るふちとく思ふをき 汀田

志そしハ風も休むをき 楓谷

サキ

さくくあきくおきふ花と成りけり 凉帛

石持りくおきまを乃三日く 輕素

めし費り出さるる形へ出代せき 冠子

元よりおきまをみくのく 李北

くまき目よはよの子の又之く結てお 鳥朴

風新ちきく春麦のく 女 志そん



雪

めくら来る其比やこの雪ぬけ 阿野津 二日坊

柳らうまそ あれと 西の歌 槿馬

錦のこの揃をもとをうけ 菱波

かろく河をそまてみれる 民古

前ち一葉も月よ花名の新世あり 咄秋

とくく古以千一ありぬ夜拾ひ 筆

月

名古屋

也有

夜科や花おらるもささくあつ

中まのひさちうをその戸の露 八亀

ささるゝいふおつ 木見

せれつうあつも揃ハき飛也 野亮

人ハあししるもなれる 路十

いたるもあつてかこまり 利推

雪

松坂

素立里

ありきるや思ふにちかき木のあと

鐘ハ物れと白き寒梅

鳥仙

子<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>糸ニ幅<sup>(糸)</sup>第<sup>(糸)</sup>と<sup>(糸)</sup>け<sup>(糸)</sup>き<sup>(糸)</sup>て

夢別

吐<sup>(糸)</sup>き<sup>(糸)</sup>皆<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>早<sup>(糸)</sup>暮<sup>(糸)</sup>る<sup>(糸)</sup>り

左凌

そ<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>内<sup>(糸)</sup>に<sup>(糸)</sup>あ<sup>(糸)</sup>る<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>序<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>き<sup>(糸)</sup>り<sup>(糸)</sup>た<sup>(糸)</sup>り

可人

秋<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>も<sup>(糸)</sup>ら<sup>(糸)</sup>ぬ<sup>(糸)</sup>る<sup>(糸)</sup>層

修古

雪

松坂

孤舟

かき<sup>(糸)</sup>跡<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>雪<sup>(糸)</sup>や<sup>(糸)</sup>か<sup>(糸)</sup>み<sup>(糸)</sup>た<sup>(糸)</sup>下<sup>(糸)</sup>地<sup>(糸)</sup>底

物<sup>(糸)</sup>れ<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>証<sup>(糸)</sup>を<sup>(糸)</sup>新<sup>(糸)</sup>く<sup>(糸)</sup>称<sup>(糸)</sup>ふ

笑山

け<sup>(糸)</sup>も<sup>(糸)</sup>是<sup>(糸)</sup>も<sup>(糸)</sup>雪<sup>(糸)</sup>道の<sup>(糸)</sup>記<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>証<sup>(糸)</sup>と<sup>(糸)</sup>あ<sup>(糸)</sup>て

芭人

ゆ<sup>(糸)</sup>お<sup>(糸)</sup>く<sup>(糸)</sup>ぬ<sup>(糸)</sup>れ<sup>(糸)</sup>し<sup>(糸)</sup>雪<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>集<sup>(糸)</sup>針

之立里

麻<sup>(糸)</sup>比<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>音<sup>(糸)</sup>は<sup>(糸)</sup>強<sup>(糸)</sup>く<sup>(糸)</sup>お<sup>(糸)</sup>も<sup>(糸)</sup>き<sup>(糸)</sup>月<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>り

一瞳

七<sup>(糸)</sup>後<sup>(糸)</sup>は<sup>(糸)</sup>や<sup>(糸)</sup>、<sup>(糸)</sup>又<sup>(糸)</sup>て<sup>(糸)</sup>上<sup>(糸)</sup>戸<sup>(糸)</sup>の<sup>(糸)</sup>縁

陶童

たのしみは先原の世より  
思ひ出さず昔より  
たのしみは先原の世より

伊勢の栢原

志すはまきり難く交るぬ月見哉

鬼夕

るはまきり難く交るぬ月見哉

巴十

白あゆも秋世の中白くもさ

寒庵

たのしみは先原の世より

枝女

やをなげさうたの世をなほ秋也

鬼秋

栢原 所の名さく清き

味噌

徒おろしと文と栢洞の

たのしみは先原の世より

是より出さず

義上

栢洞も若くもまや山きくさう

(没草) 徒おろしと文と栢洞の

栢洞

着よきく原のまきりたのしみ

上

米んさうり喰ふ船は月見

洞

割れは月板も響の男と云

と

(船や) 御船や出さず麻乃内也

洞

風子けえさやく夜のをみちし

このまをそれわんもら好茶

祖父さるハ大徳ハ昔ハ教をこして

いつきもまもりてそまきり

存のよみ音おの境のふああれを

四五十書能うきい音問

何人ノ後ろも今ハ二階堂

娘よきろとちやてあんらん

上

洞

と

洞

上

洞

上

洞

負まら此便に文のちりし業

獲つくーく温泉ハ娘よ

水向ハ火の子舟のさうらうま肉もて

指の能能はきいひやよ花散ら

と重張ると藤らうと蝶の飛来は

茶ねおふふきり親もたふん

まらうとむらうの上の方ま

くよの清水も及ては化糖

上

洞

上

洞

と

洞

上

洞

清きけし刺刀 思ふ日もあて 上

御前損ふ生垣乃ら戸 洞

まると出て雪後ひらるる日 上

小袖はほそ<sup>(之)</sup>ぬ犬かかへん 洞

傳平の目も思ふてゑおをれ 上

こもとの交へる友理理色名 洞

初月入弓小増もあはれ 上

ちよの夜はひく〜回か 洞

若葉菊乃るやをも狸と礼つて 上

甥ホも欠ぬ味〜うま 洞

とよよ〜二日三日意ひ和也 上

物ねか〜よも棟上の正酒 洞

山里の花々都り〜縁あり 上

城下か〜してお接るも満足 洞

春ノ部

麦浪連中

思ふ出馬山をみる茶や(は)きみ

如之

大文字のあとをとりたるやつり

菊茂

あとの葉より花をみし(雪)てすむる量

曾呂

あつたむらゝふり乃白飛ふ

茶城

光陰ハ伸まき茶もも風巾

畔古

ままをそと破れくもは干く南

僧  
芦帆

ふまのあとを採るるさむり猿月

麦推

○

廿三



星色の世に花をうりて 玉露  
 かゝる世を皆くりにてを有  
 ちあふも 揮毫もしとぬ 板角  
 磨人も 見之者 腫の目より  
 梅さや 香の煙ハきくも  
 花さる 花や 風さくよる  
 幸さく 見たりと かゝるも 梅  
 山さるも 定ぬるありさる

寸重  
 有雪  
 為洋  
 程夫  
 云步  
 怨九  
 祐古  
 翫古

花さるやあまの 梅さる  
 梅さるて 花ぬ 花さる 白さる  
 山さるく 白さるも 花さる  
 年さるく 花さるを 梅の  
 其水ハ 花さるも 梅さる  
 花さるハ 花さるも 花さる

里圭  
 秋巴  
 知柔  
 羅二  
 松栗  
 素道

水音会連中

花さるく 杖乃く 花さる  
 路考



まをわきてるるよふとせん極の光  
標良  
崎よ人拾や一庭系ゆ平な本  
松丈

春之部

ひらふよ親のあつらふまふ  
蝶奴  
形綱のちまねて生海軍森  
浪凡  
無縁成流わふまふらふの下  
八鬼  
甲縁下切まの奇や縁月  
兔絲  
山ふさわにまのりまふらふの川  
古拵

尻つちりるまふまふり山さぬら  
里朴  
石目刺しつりけしやるる橋  
吳雪  
ちやん花や月りの逢を止る妻  
巨十  
たしと向んまふらあまの筆も流  
榊雲

夏之部

松堂連中

ほろろきまふあち平砂やるるも  
木吾  
よのなハあしるるもむとむとむと  
圭常向  
藤の松平かつらぬまや杜解  
五松



ちりりと相成ほる後ひる電光  
 松風もぬるんとしてく星屑  
 日若くや女糸と(成)水糸と  
 あらむあらし碑引る人時鳥  
 やり依る併くそ我清水也  
 歌翠  
 雨香  
 可條  
 魯十  
 曾丸

復元部

杜宇 滝 以 志 家 子 孫 子 子  
 関 守 也 必 云 損 乃 何 也 其 也  
 木子童  
 莖耳

指 奇 此 亭 子 夫 夫 乃 乃 乃 乃 乃  
 寂 一 丁 忌 年 止 止 止 止 止 止 止 止  
 子 規 欠 此 口 的 乃 乃 乃 乃 乃  
 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五  
(明)  
(染)  
 染之  
 免船  
 青波  
 青布  
 藻波  
 其煩

秋の部

ちりけねやおとよまきくは猿服  
 菊茂  
 袖風館連中



朝のそよ風は是く量(量)ふ秋の風  
待(待)志(志)紙(紙)張(張)て量(量)西(西)風(風)式(式)  
東壺  
浮石

秋の部

夕(夕)々(々)名(名)ハ満(満)ぬ月(月)久(久)の懐(懐)紙(紙)ま  
風(風)吹(吹)れ告(告)白(白)もや一(一)今朝(今朝)の秋(秋)  
月(月)ひさ心(心)と秋(秋)まれくを日(日)か  
雪(雪)月(月)つと一(一)他(他)糖(糖)もぬめ七夕(七夕)  
可(可)也(也)は秋(秋)法(法)せくを今(今)月(月)の月(月)  
素川  
茶菊  
李江  
倭客  
白毛

冬(冬)月(月)や西(西)々(々)と又(又)病(病)々(々)  
百童

冬之部

妙見甲連中

冬(冬)のりや丸(丸)りてあ(あ)る空(空)之(之)解(解)  
起(起)しを又(又)踏(踏)か(か)る手(手)可(可)有(有)  
其(其)口(口)  
行(行)あ(あ)る鳥(鳥)の夢(夢)や雪(雪)くは(は)る  
七(七)は日(日)影(影)り埃(埃)の留(留)る秋(秋)く那(那)  
雲(雲)甫(甫)  
戸(戸)後(後)耳(耳)  
文(文)水(水)  
其(其)口(口)  
戸(戸)後(後)耳(耳)  
雲(雲)甫(甫)

冬之部

言(言)のな(な)に霜(霜)な(な)枯(枯)ぬ(ぬ)か  
排(排)如(如)

子母年と季一もと同くは桂野  
 花もを古らまの 語やまの 強  
 朽ぬ名や年内を言いつまぬも  
 こくくく 花音のしと来る 花のま  
 穉八や 物又坊をりささみ 儀  
 今声す 橋の出をまゝる かけ那  
 方あり出てあは 橋なる 昔の乳  
 言を 花や 出せの 知まぬ 星は下

排雲  
 東里  
 湖岸  
 一壺  
 湖舟  
 甘香  
 总船  
 宇治  
 起口

穉易物をま徳いあり 雪もあけ  
 ちくちく 花もあや夜りまをま  
 極楽張出く<sup>(一)</sup> 花の 言えが  
 花之香連中  
 晴くわくく 花の 花や 冬 柳  
 赤あつくく 人もか 花の 十夜 草  
 臘ふや山出まいもく 花の 春 李  
 花や 衣手も 何の 花の 花の 竹

草浦  
 柳丈  
 凉花  
 律古  
 園李  
 和詞  
 舎丸



下くして風を地をこし抄野を  
 やみぬをりしきこもれや跡なき  
 名もなき野をさるりかきふゆり那  
 張るもなきいれをけしり  
 流友  
 文史  
 巴那  
 洗利

桑子物のちやれ糸北大振引  
 七つ〜くうふよたかふおれ海草を  
 赤きみのきりしめりる寒れ月  
 桑菊  
 標良  
 赤少

春 諸国支部

制れりし松の葉をそ山さるり  
 梅きやほ〜川よまふ〜花  
 十重扇よりや海氏の物か〜り  
 春風〜踏く海や路の塔  
 水の流るふおほ後〜  
 侍より奇なる流のいりや吉野川  
 東武  
 秋瓜  
 如本  
 珈凉  
 五菱  
 後川  
 是甫  
 小松

壽一本をのののあやうし  
里流

ちやちやのあやうし  
琴松

福人會や玉を  
和州古山

子孫もさう人を  
耳棠

おぼろのあやうし  
蓑夕

山中のあやうし  
名古や路十

常世の子を  
去角

十喜を  
ひら芳斗

春の他<sup>(七)</sup>に  
脚呼

あはれ<sup>(七)</sup>を  
修古

こころ<sup>(七)</sup>を  
一瞳

世をさうし  
可人

まをさうし  
名山

襟も  
越中富山  
麻又

夏花

まをさうし  
名古や  
五文坊

寂一了意〜 ちげ 備と 及

年一 春の 結重と 杜宇

氷室を 小ぶも かけり ちと ます

庭の 月ハ ちれ ちと ちと ちと ちと

物を ちと ちと ちと ちと ちと ちと

あへ ちと 鳥 ちと ちと ちと ちと

ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

ちと ちと ちと ちと ちと ちと ちと

竹郎

曾文

也有

善東

羅外

瓢子

細言

鬼凌

南紀

加んこ

詩の集

保(ま) ちと ちと ちと ちと ちと ちと

明(ま) ちと ちと ちと ちと ちと ちと

松人 乃 体(ま) ちと ちと ちと ちと

影(ま) ちと ちと ちと ちと ちと ちと

れ(ま) ちと ちと ちと ちと ちと ちと

起(ま) ちと ちと ちと ちと ちと ちと

弱下 結(ま) ちと ちと ちと ちと ちと

床(ま) ちと ちと ちと ちと ちと ちと

江島

素有

和水

松生

惟山

東圃

秋石

乙中

去州川

甲の聲

林五

さきさきして一松を反すや時を

かきか  
南尹

子規なきのさきの町の中

知友

とやまのこふむ返あり杜宇

松井

雙の木のさや かきか

松又

有明の舟も室をほとぎん

桃李

と花もあまも生れ物不都は

柳司

まきねふかり極の居や時を

まき井

費うつたねおとひきほ かきか

冊冬

子規 籠おきと海ふく 酒

卜林

ほくきあゆもさう 山極

子鼻

りのや 人 まき く 程 海 の上

金辰  
珈凉

三ヶ月も吾れてまがる 輪舟

巨井

今一たのみり 向 ら な し 歌 ら

和州  
去路

杜鰐 取 す く 日 や 丸 丸

六柳

草平 結 ひ あ や 山 詠 の 海 と 花

際角

備 と く 中 の あ ま の 別 水 下

東故

冊六

みしう夜や枝も影もあはれ  
起しきりつづる影あり杜の  
影は口北月しよ声あり松の  
船人の世うとうう涼し友の  
夢の外の橋士も追うて  
さす建さしきあふくや杜の  
竹の子や新船の目玉杖と

秋の歌

里船  
松坂  
左凌  
芭人  
五蓮  
吉家  
寛政  
龍文

秋風のおおきくとまふふ  
人中一我情ふよくなき月思ふ  
影あふくしきあまくる足掛  
く月や木槿の葉の指さぬ  
草花葉のちかき影やうら  
まらるる月や研清か  
扇まきしきあはれ後の月  
あのをよきあふく

加  
後川  
小松尾  
正以  
花仙  
可川  
和夕  
一左  
風若

美さ此目も相なるをあら

新をけしとみふ目もあり

名月や言もさか輝の止る

名月や心の通ふ<sup>わ</sup>弥生山

運の葉よ二葉も清らうとす

月清く照す<sup>あ</sup>あ木はくやき<sup>あ</sup>の

る〜月あしも暑し〜鏡山

夜は又〜ふはむあ塚の露

波 瞳

八 重

以 成

什 仙

松坂 修 古

鳥 仙

之 童

陽 童

津

鳥 乙

梅 実

春 子 周

和 谷

宇 鐘

南紀 二 塔

十 良 節

名 止 野 江

七夕や月相鳥に橋の層

七の音も陽子陽れ相定ふ

孫入ぬ蝶の羽き〜孫はあふ

孫と〜今一葉〜也麻のあ

大根のき〜あ〜形〜葉はあ

日よ思ふはああ〜月あ

稲妻あ〜や〜おあ葉

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

大空のみまじりおやうりあ

八亀

名月も拂ふぬ袖より露の花

米布

木末うさやせとるをさう後の舟

藤里

さるやういさく此もあやほのこ

桑谷

く名のや増らえさう松の影

李設

く名月やと毒の一本を目よ

可風

なまこ玉の思もろれ二刀合

史列

さるのちやーしをれと志とる

浪流

くしうふきりー十二二年の火煙とる

巨峰

いさくさるや屏風や水標花

寸舌

おちろりむまのゆきとや松の影

長眉

踏ぬ智恵一ひかーしう船の音

馬明

誰係ふみさるひれせんを等

多醉

友白四季混雑

廿九

河<sup>(も)</sup>を舟<sup>も</sup>を野<sup>を</sup>をあ<sup>ら</sup>め<sup>て</sup>小<sup>さ</sup>き<sup>川</sup>

東武涼傳連中  
怪素

層<sup>た</sup>の<sup>水</sup>の<sup>水</sup>は<sup>海</sup>に<sup>流</sup>れ<sup>て</sup>小<sup>さ</sup>き<sup>川</sup>

冠子

川<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>を<sup>日</sup>に<sup>新</sup>く<sup>て</sup>舟<sup>中</sup>に<sup>舟</sup>

李北

又<sup>舟</sup>と<sup>舟</sup>へ<sup>舟</sup>を<sup>舟</sup>と<sup>舟</sup>

鳥朴

水<sup>を</sup>舟<sup>の</sup>舟<sup>に</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

去あへ

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

宜雅

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

吟風

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

西羊

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

望秋

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

菱波

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

民古

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

権三

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

加十松  
山叩

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

斧友

舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>を</sup>

三軌

西



舞ふそら日なかなんけさのる

風静

初雪や改しきる海の人

女 信音

温石をさうすおほきや夜の雪

菊上

月あつて二日の影やと影の

一豆笠

初七や豆あそびうかひのこゑ

竹玉

竹のふしあつかんやあけきの音

竹画

かくおきふらけしとれおの音

雨雀

さしあつておの音

麦水

る性あつておの音

四角 宜角

あつておの音

三曹

初七や都へ思はり

甚好

ちちのこゑあつておの音

必孝

はつておの音

猪猪史

風の音あつておの音

禹月

初七やあつておの音

名丁 彦存

梅のこゑあつておの音

布衣

○

111

七郎の根や形は横火のきとあり

蓮阿

さくら姫の石は様をせてちのけり

大市秋

梅向くさくらにやあまふれ哉

飛良

川ちよもささるお孫あのみるる

山只

埋やわ弁言のむりつふやきぬ

麦瑯

今鶴<sup>(日)</sup>らうかみもえんちるを

越後言田  
松景

日月らにやまうらも知おねの言

湖南  
文素

ふるれやまふまふとんをを

和州  
麦畑

初市ちの海や孫のきとく人の

仙と無

小まはなもかられうおまの影

弁鬼

根のやまきとくおあつたの道

奇笛

おまのきとく仙人もあり山さくら

津  
雨籬

こののゆきとくたなまや一あろ

茶葉

蒼き空を流るるのいつちそみよの音

東武  
秋瓜

星もさるる空ふかへ秋の月

左右

紅顔の能もひりきりて

至昔

一二階をのりあつていへん

飛(東)

うねりていへるれて日とぬ

板之

越しと傳ふるもとあふ

象山

冬詠

いさよれと人あつて山さぬ

秋扇

あつたあつたあつたあつたあつた

都西

いさよれと人あつて山さぬ

板之

いさよれと人あつて山さぬ

左右

いさよれと人あつて山さぬ

飛来

いさよれと人あつて山さぬ

柁雪

いさよれと人あつて山さぬ

東洲

いさよれと人あつて山さぬ

至昔

○

1111

冬の日も反はるも中のみさよふ  
かへる花さきひきまはるの海  
み

原魚

百舟

亡父の旧友

舟

花のさく本をいそぐ廿二月か  
舟のさめはれ舟や山さぬら

足跡  
曾北

保とくま舟

歌の一夜の月の欠  
冠きく遠くて舟舟杜宇

麦林  
南利

舟

舟連ぬ大名又うらひの舟

芦本

夕月やさき舟影はあ

季渡

舟

舟とみれん舟名をやらせぬ  
舟を舟志して舟舟舟

涼忠  
百川

汝乃言山極つりまゝ 逸士の他時十手  
人先直道流りまをり けし<sup>あ</sup>け<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>お  
白<sup>其</sup>なるおのしをく 精女大士人か  
を<sup>け</sup>け<sup>れ</sup>ぬ<sup>る</sup>平を志う せん<sup>け</sup>ん<sup>か</sup>十<sup>年</sup>  
人<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>る</sup>と<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>十<sup>年</sup>あ<sup>の</sup>け<sup>り</sup>  
ま<sup>ま</sup>ん<sup>か</sup>の<sup>所</sup>お<sup>ま</sup>人<sup>あ</sup>ん<sup>あ</sup>と<sup>さ</sup>う  
う<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>え<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>  
ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>ん<sup>ん</sup>伊<sup>勢</sup>方<sup>方</sup>他<sup>時</sup>牙<sup>牙</sup>は<sup>は</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>



大英欽命駐劄  
廣東總領事官  
臣 德 麟 跪  
奏

